

日本在来織布の研究

— 葛布について —

小林孝子

A Study of Cloths Native to Japan

Cloths Woven of Kudzu Plant

(*Pueraria lobata* OHWI)

Takako KOBAYASHI

I. はしがき

日本在来とは、木綿が伝来し、栽培される以前の織布という意である。柳田国男氏の「木綿以前の事」には、麻・楮・藤・葛・楡などの布名を見ることができる。私はこれらの植物から繊維を採り、布を織る工程を調査したので、逐次報告していきたいと思う。まず今回は葛布について報告する。

葛布については、

をみなへし生ふる沢辺の真田葛原何時かも絡りてわが衣に着む (巻7・1346)

と万葉集にもあるように、すでに当時葛から糸をとり、衣料としていたことが知られる。しかし後世木綿が普及するにつれて、だんだん使われなくなった。掛川誌稿(文化二年)には「葛を以て布を製することは天下特に我掛川のみ古今本州の中すら他郡に出ることを聞かず」と記し、和漢三才図会にも「葛布出於遠州懸川」と記して、すでに江戸中期に葛布は掛川地方のみの特産物とされていた。

ところが、薩藩の三国名勝図会(天保十四年)には、甌島の物産の一つに葛布が記されている。東海道の宿場町掛川とは対照的な、鹿児島本土の西45kmほどの海上に浮ぶ離島甌島にも、さらに九州北部の佐志においても葛布が織られていたのである。

ところで葛は、北は北海道から南は九州に至るまで、山野に繁る丈夫なつる状草本である。牧野日本植物図鑑によれば、「根は肥大にして薬用とし、又葛粉を製す、又茎皮にて葛布を織り、葉は牛馬の飼料とす」と記されているように、古来葛は衣食住万般にわたる有用植物として重宝がられたものである。木綿が普及したあとも、山間離島に葛布の紡織が残っているのも決して不思議なことではない。

II. 佐志の葛布

佐志は、佐賀県唐津市の農村地帯である(図1)。数年前までは数人の媪が葛布を織っていたが、現在では技術の伝承者は一人だけである。

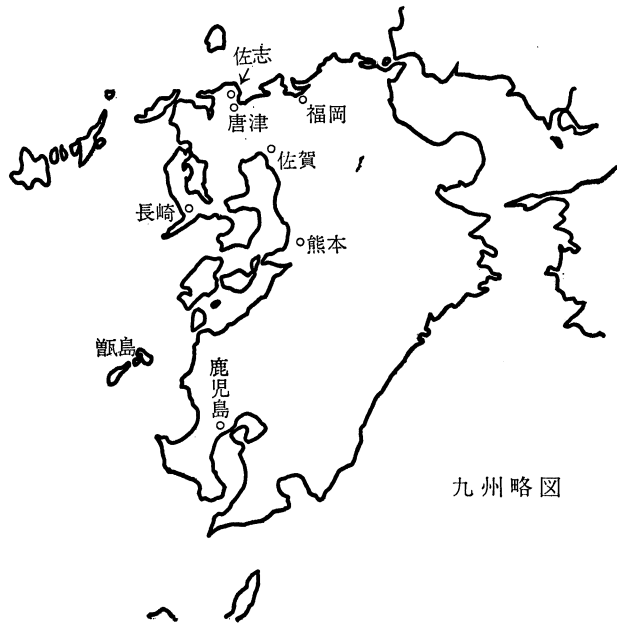


図 1

1. 毎年夏になると山に葛の採集に出かける。葛のつるを一ヒロ半位づつに切って葉を捨て、ひとにぎりづつ束ねたものを家に持って帰る。
2. 持帰った葛の束を釜に入れて、水で茹でる。煮沸後一時間以上茹でる。
3. 茹でたものは、束ねたままヨコヅツ(図2)という木槌で叩き、芯部を取り去る。
4. 土の上に、取り去った芯部(ミ)を敷いて、その上に皮の部分を置き、さらにミをかぶせて数日置く。
5. これに朝と夕に水をかけ、醗酵して外皮がドロドロになってきたときに(図

3), タライの水に一日漬ける。翌日、川に運んで外皮を洗い落す。

6. 残った白い繊維を陽に干して乾かす(図4)。
7. この繊維を細く割いてつなく(績む)(図5)。
8. 績んだ糸は、糸車で撚りかける(図6)。
9. 緯糸にする糸はヨコウツシ(図7)に巻き、経糸はワク(図8)に巻く。
10. 緯糸はヨコウツシからはずしてカセカケ(図9)にかけ、クダに巻いて抜いたものをヒに入れる(図10)。
11. 経糸は整経し(図11)、箆目に通して地機にかける(図12)。

以上の工程で現在織っているものは、織目の粗い布で、シキノ(図13・15)と称し、蒸器に敷く布として用いる。従来は魚網などにも用いた。

(図15・16)は葛布のヒッカケで、現在福岡市内にあるが、佐志で製作されたものである。経糸は紺木綿糸、緯糸に撚りをかけない葛糸を用いて、美しい光沢がある。

III. 掛川の葛布

掛川は、広重の東海道五十三次の絵にもあるように、宿場で知られたところである。現在の掛川市は、人口約6万の旧城下町である。(図17)

1. 葛(図18)は、掛川市北部の農村地域で採集する。六月中旬から夏の間採集するが、七月頃採ったものが良質である。採集した葛は先ず佐志と同様水で茹でる。茹でたものはすぐに川の水につける。
2. 5~60 cm ほど土を掘って、その中にカヤ・ススキなどを敷いた上に茹でた葛を並べ、さら

